





研究者名※	森 理恵 MORI Rie	学位※	博士(学術)
所属※	家政学部 被服学科	職名※	教授
連絡先	morir@fc.jwu.ac.jp		
URL	なし		
researchmap※	<a href="https://researchmap.jp/read0185386">https://researchmap.jp/read0185386</a>		
研究分野※	デザイン学、生活科学、ジェンダー、芸術学		
研究キーワード※	芸術、美学、デザイン史、服飾史、服飾文化、身体・表現・メディア、工芸・意匠・服飾史		
共同研究・競争的資金等の研究課題	戦争と慰問文化—慰問の実践とシステムに関する文化史研究(科学研究費・基盤B・共同研究者、2016～2019年) モノにみる現代日本の生活文化と歴史の発掘とその活用に関する研究(科学研究費・基盤C・共同研究者、2012～2015年) 20世紀における「きもの」文化の近代化と国際化 —物質文化・表象文化の視点から—(文部科学省委託服飾文化共同研究・研究代表者、2009～2012年)		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴			

研究領域	デザイン学、生活科学、ジェンダー、 芸術学	(SDGs)	 
研究テーマ※	近代東アジアにおける衣服・ファッションの混交と変容		
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】 近代の東アジアにおいては、人・物の移動・交流が活発化すると同時に、帝国主義と民族主義(ナショナリズム)の進展がみられた。そのような状況において、衣服・ファッションもまた、流動化し、混交する一方で、「民族衣装」のように人々の集団を象徴し、表象するとみなされるような衣服の形態も発展した。本研究は、そのような、近代東アジアにおける衣服・ファッションの混交と変容の実態を明らかにしようとするものである。</p> <p>【応用例、研究の展望】 「キモノ」や「チャイナドレス」など、ある民族の「民族衣装」とされ、その国を表象するものとして扱われているような衣服・ファッションについて、それが如何なる目的のもとに作り上げられ、その歴史が如何に解釈をされているかを明らかにする。また、それらの衣服・ファッションの歴史と、近代の帝国主義・民族主義(ナショナリズム)、そしてジェンダーが密接に結びついていることを証明する。</p> <p>【研究方法の特色】 近代東アジア地域の新聞・雑誌、文学、映画、そして現存する衣服の実物を主な調査対象とする。</p>		
本研究関連特許・論文等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森理恵、「第1章「キモノ」表象の民族主義と帝国主義」、『グローバル関係学5「みえない関係性」をみせる』、pp. 26-44、岩波書店、2020年11月</li> <li>・MORI Rie. The Monpe as a Totalitarian Costume: Japanese Farmer Work Pants as a Wartime Uniform for Women in the Japanese Empire. in <i>Lessons to Learn? : Past Design Experiences and Contemporary Design Practices -Proceedings of the ICDHS 12th International Conference on Design History and Design Studies</i>, eds. Fedja Vukić and Iva Kostešić. Zagreb: UPI2M Books, 2020, 409-418.</li> </ul>		
共同研究・外部機関との連携への期待	近代東アジア地域の資料を保存活用する機関との共同調査・研究。衣服・ファッションの視点からの資料の分析・解釈。		